

小宮豐隆監修
宮本三郎校注

校本芭蕉全集

第四卷

連句篇
(中)

角川書店

校本 芭蕉全集
第四卷



昭和三十九年十二月三十一日 初版發行

定價 一〇〇〇圓

校注者 宮本三郎

發行者 角川源義

印刷者 中内あき子

製本者 鈴木俊一

發行所 株式會社 角川書店

東京都千代田區富士見町二ノ七
振替口座 東京一九五二〇八番
電話九段(261)〇一一(代表)

Printed in Japan

中光印刷・鈴木製本

落丁・亂丁本はお取替へ致します

目次

概説

九

連句篇(中)

宮本三郎校注 三

凡例

三

元禄元年(貞享五年)

七

一四 何の木の (歌仙)

七

一四 梅の木 (発句・脇)

三

一四 暖簾 (発句・脇)

三

一五 紙衣 (表六句及び付句)

三

一五 時雨 (発句・脇)

三

一五 さまぐ (発句・脇)

三

一五 杜若 (三句)

七

一五 しるべ (発句・脇)

六

- 一五 鼓子花の (歌仙)
 一六 どこまでも (表六句)
 一七 蓮池の (五十韻)
 一八 見せばやな (発句・脇)
 一九 蔵のかげ (三句)
 二〇 よき家や (表六句)
 二一 初秋は (歌仙)
 二二 粟稗に (歌仙)
 二三 色々のきくも (五句)
 二四 しら菊に (半歌仙)
 二五 厂がねも (歌仙)
 二六 月出ば (半歌仙)
 二七 其かたち (歌仙)
 二八 雪の夜は (歌仙)
 二九 雪ごとに (歌仙)
 三〇 皆拝め (三十句)
 三一 折提ぬけ初る (付句付句)

七 八 九 十 十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九 二十 二十一 二十二 二十三 二十四 二十五 二十六 二十七 二十八 二十九 三十

元禄二年

- 一三 水 仙 は (歌仙)
 一三 衣 襷 して (歌仙)
 一四 か げ ろ ふ の (歌仙)
 一五 月 花 を (発句・脇)
 一六 萩 お ふ (歌仙)
 一七 落 くる や (発句・脇)
 一八 風 流 の (歌仙)
 一九 か くれ 家 や (歌仙)
 二〇 旅 衣 (三句)
 二一 茨 や う を (三句)
 二二 雨 晴 て (四句)
 二三 す ぐ し さ を (歌仙)
 二四 お き ふ し の (歌仙)
 二五 さ み だ れ を (歌仙)
 二六 御 尋 に (歌仙)
 二七 水 の 奥 (三句)
 二八 風 の 香 も (三句)

二九 允
 三〇 允
 三一 允
 三二 允
 三三 允
 三四 允
 三五 允
 三六 允
 三七 允
 三八 允
 三九 允
 四〇 允
 四一 允
 四二 允
 四三 允
 四四 允
 四五 允
 四六 允
 四七 允
 四八 允
 四九 允
 五〇 允
 五一 允
 五二 允
 五三 允
 五四 允
 五五 允
 五六 允
 五七 允
 五八 允
 五九 允
 六〇 允
 六一 允
 六二 允
 六三 允
 六四 允
 六五 允
 六六 允
 六七 允
 六八 允
 六九 允
 七〇 允
 七一 允
 七二 允
 七三 允
 七四 允
 七五 允
 七六 允
 七七 允
 七八 允
 七九 允
 八〇 允
 八一 允
 八二 允
 八三 允
 八四 允
 八五 允
 八六 允
 八七 允
 八八 允
 八九 允
 九〇 允
 九一 允
 九二 允
 九三 允
 九四 允
 九五 允
 九六 允
 九七 允
 九八 允
 九九 允
 一〇〇 允

- 一八 有難や (歌仙)
 一九 めづらしや (歌仙)
 二〇 涼しさや (七句)
 二一 温海山や (歌仙)
 二二 忘るなよ (四句)
 二三 忘るなよ (歌仙)
 二四 文月や (二十句)
 二五 星今宵 (二十六句)
 二六 薬欄に (四句)
 二七 寐る迄の (四句)
 二八 残暑暫 (半歌仙)
 二九 小鯛さす (表六句)
 三〇 しほらしき (四十四)
 三一 めれて行や (五十句)
 三二 馬かりて (歌仙)
 三三 あなむさんやな (歌仙)
 三四 もの書て (発句・脇)
 三五 胡蝶にも (発句・脇)
 三六 野あらしに (半歌仙)

- 一三 一四 一五 一六 一七 一八 一九 二〇 二一 二二 二三 二四 二五 二六 二七 二八 二九 三〇 三一 三二 三三 三四 三五 三六 三七 三八 三九 四〇 四一 四二 四三 四四 四五 四六 四七 四八 四九 五〇 五一 五二 五三 五四 五五 五六 五七 五八 五九 六〇 六一 六二 六三 六四 六五 六六 六七 六八 六九 七〇 七一 七二 七三 七四 七五 七六 七七 七八 七九 八〇 八一 八二 八三 八四 八五 八六 八七 八八 八九 九〇 九一 九二 九三 九四 九五 九六 九七 九八 九九 一〇〇

二〇八 こもり居て (表六句)

二〇九 それぐに (三句)

二一〇 はやう咲 (歌仙)

二一一 秋の暮 (四句)

二一二 一泊り (歌仙)

二一三 いざ子ども (歌仙)

二一四 とりぐの (五十韻)

二一五 霜に今 (歌仙)

二一六 曉や (五十韻)

二一七 少将の (発句・脇)

二一八 草箒 (発句・脇)

元禄三年

二一九 鶯の (歌仙)

二二〇 日を負て (半歌仙)

二二一 種芋や (歌仙)

二二二 木の本にその一 (四十句)

二二三 木のもとにその二 (歌仙)

二二四 木のもとにその三 (歌仙)

一八五

一八六

一八七

一八八

一八九

一九〇

一九一

一九二

一九三

一九四

一九五

二〇六

二〇七

二〇八

二〇九

二一〇

二一一

二一二

三
四
いろくの
(歌仙)

三五市中は（歌仙）

三秋立て（歌仙）

三七 白髮ぬく
(半歌仙)

三稗柿や（三句）

三月しろや
(発句・脇)

三〇 月見する (歌仙)

三 灰汁桶の（歌仙）

二三 見送りの（発句・脇）

三三 鳶の羽も（歌仙）

三言 ひき起す (歌仙)

三五半日は（歌仙）

元祿四年

三六 梅若菜その一 (歌仙)

二七 梅若菜その二（歌仙）

三 芽出しより
(五句)

三
蠅
ならふ
(歌仙)

二〇 牛部屋に（歌仙）

二五九

III

1157

二五

二五三

二五

二五五

二五九

三六三

一六三

二六

1411

1133

•

1144

三

二八五

二六

二九〇

補注

- 二四 安々と (歌仙)
 二三 御明の (歌仙)
 二二 うるはしき (歌仙)
 二一 草の戸や (発句・脇)
 二〇 たふとかる (発句・脇)
 一九 木嵐に (発句・脇)
 一八 もらぬほど (半歌仙)
 一七 水仙や (十二句)
 一六 奥庭も (発句・脇)
 一五 其にほひ (歌仙)
 一四 此里は (歌仙)
 一三 京に (八句)
 一二 宿かりて (三句)

二四 元四
 二三 元六
 二二 三〇三
 二一 三〇六
 二〇 三〇六
 一九 三〇七
 一八 三〇八
 一七 三〇
 一六 三三
 一五 三三
 一四 三三
 一三 三六
 一二 三〇
 一一 三三
 一〇 三三

概説

俳諧の連句文芸についての、一般的な形式や基本的な法則、及びそれが貞門・談林時代を辿って、いわゆる蕉風時代が現出するまでの道筋やそれぞれの時代・作品の特色に関しては、本全集の連句篇上巻の概説に述べられている。今、本書には、上巻が寛文期より貞享四年末までの作品を収録したのに引続いて、元禄元年（貞享五年九月改元）より同四年末に至る、いわば蕉風成熟期の作品を収録した。この時期には、芭蕉七部集でいえば、『阿羅野』『ひさこ』『猿蓑』といった代表作品を含み、ことに『猿蓑』は単に連句のみにとどまらず、発句にも文章にも、蕉風俳諧の完成度を示す最も精選整備された撰集だと評価せられている。『猿蓑』所収の連句の大部分は、芭蕉が相手の力柄や性格を知り尽くした、芭蕉に親炙した門弟たちを連衆とし、そこに芭蕉の忌憚ない批評や指導添削が行き届いた結果と思われる、傑作の名に恥じないものとなっている。そして、世上、それらの蕉風連句の付合手法とさえいえば、蕉風俳論として一般に説かれる、いわゆる「にほひ・うつり・ひびき」が最大唯一の特徴をなすものとされており、「にほひ」とはかくかくのごときもの、「うつり」とはかくかくのごときもの、「ひびき」とはかくかくのごときものと、蕉風俳論書にたまたま現われた片言隻語や付合例の一斑を以て、これらを定義し、古注も新注も、これらの術語乃至理念にあてはめて、蕉風連句作品を解釈し鑑賞しようとする。

しかし今、これらの付合を説明する用例として、すぐ引合に出される有名なものの、ほんの一端にふれて見ても、たとえば、『去来抄』（修行）によれば、

(A) 赤人の名は付かれけり初霞 史邦

鳥も轉る合點なるべし 去来

の付合（この発句は『鶯獅子集』に、「桃花坊に春をむかへて」と前書して所収。史邦が京都の去来の本宅で新春を迎えた折のことで、元旦の日が東山に風雅人去来に対する挨拶の意もこめられていると見られる。脇句はその景に相応ずるかのごとく、鳥も囀り出すさまを付けたものである）について、芭蕉が「うつりといひ、にほひといひ、誠に去年中、三十棒をうけられたるしるし」だと賞讃したという。去来はこのあとに、「つかれたり」とある故、「合点なるべし」と応じたので、「其いひぶん（注、表現の意）のにほひ、相うつり行く所見らるべし」と、牡年の間に答えて説明する。そしてそれがもし、発句に「名は面白や」とあるならば、脇句は「轉る気色也けり」とすべきだと言う。この部分を読んで見てもわかる通り、芭蕉も去来も、「にほひ」と「うつり」とを特に区別して用いてはいないこと明らかである。『去来抄』はこれに続けて、「響は打てばひびくがごとし」と言っている。

(B) くれ椽に銀土器をうちくたき

身細き太刀の反る（かた）ことを見よ

の例をあげている（この付合は『既望』所収、本書二九七頁参照）。

一方、『三冊子』（赤）には、

(C) 野松に蟬の鳴立る声
歩行荷持手ぶりの人と嘶して

の付合（『となみ山』「葉がくれを」の巻、前句は浪化）をあげ、土芳の「前句の鳴立る声といひはなしたる響に、勢ひをおもひ入て、うち急ぐ道行人のふり、事なく付たる句ひ宜し」という評を見ると、「ひびき」は「にほひ」に通じるものとなり、また

(D) 敵よせ来る村松の声
有明のなし打烏帽子着たりけり

の付合（『初懐紙』「日の春を」の巻、前句はちり、付句は芭蕉。連句篇上巻三二頁参照）について、「前句の事をうけて、其句の勢ひに移りて付たる句也」（三冊子、赤）ともある。「ひびき」が前句の句勢・語勢を感じ取って、それには、つしと応ずる付け方とするならば、これはまさに「ひびき」の「うつり」とも言うべきもので、(B)や(C)との間にどれほどの径

庭を認め得ようか。また(A)では、「にほひ」とか「うつり」とかの語しか用いていないが、「名はつかれたり」とあれば「合点なるべし」と応じ、「名は面白や」とあれば「気色也けり」と応ずべきだという時、前者はそのまま「ひびき」の例として適用し得るではないか。

ただし、芭蕉が蕉風連句の手法として、「今はうつり・ひびき・にほひ・く、らいを以て付るをよしとす」(去来抄、修行)と言ったうちの「位」と、また「師のいはく、付といふ筋は、句・響・倅・移り・推量など、形なきより起る所なり」(三冊子、赤)と言ったうちの「倅」とは、上述の漠然とした「にほひ・うつり・ひびき」とはいささか趣を異にし、「位付」「倅付」と、連歌以来の名目もあって、具体的な付け方としてこれを指摘し得る。「位」とは一句としての品位・品格をいうが、連句の付け手法としては、前句に表現されている人物または事物の品位をよく見定め、それに応じて付句を付けることで、『去来抄』(修行)に、去来は牡年の質問に答え、芭蕉の恋句を引いて、

上置の干菜きざむもうはの空
馬に出ぬ日は内で恋する

という『炭俵』『振売の』の巻(前句は野坡、付句は芭蕉。連句篇下巻参照)の付け合については、「此前句は人の妻にもあらず、武家・町家の下女にもあらず、宿屋・問屋等の下女也」と見定め、付句にはその恋の相手にふさわしい馬方を出した例を示し、以下四例をあげて説明している。また「倅(面影)」については、去来は「うつり・

響・匂ひは付やうのあんばい也。おも、か、げは付やうの事也。むかしは多く其事を直に付たり。それを倅にて付る也」(去来抄、修行)と言つて、

草庵に暫く居てはうち破り ばせを
命嬉しき撰集の沙汰 去来

の付合(『猿蓑』所収、本書二四六頁参照)について、初め「和歌の奥儀をしらず云々」と、かの西行が頼朝に和歌の奥儀を問われた時の故事を、去来が付けたのに対し、芭蕉が「前を西行・能因の境界と見たるはよし。されど直に西行と付んは手づ(注、拙劣の意)ならん。たゞおも影にて付べし」と評して、かく直された旨を記している。この改削の付合では、事実そのままの西行を付けたのでなく、何となく、西行・能因などの倅が自然浮かみ出るというのである。要するに、露骨な付け方を避ける点では、これらも「にほひ」の一種と言えよう。

かくて、「うつり」も「ひびき」も、余韻・余情という点で、「にほひ」の中に包摂されてしまふ。この意味では、支考が『葛の松原』(元禄五年)に、「走」ハシリ「響」ヒビキと共に、「馨」ニホヒの付合例として、

稲の葉のびの力なき風 珍碩
発心の初に越ゆる鈴鹿山 芭蕉

(『猿蓑』所収、本
書二七八頁参照)

をあげたのに対し、芭蕉が「馨といふ事は、百韻が百句ながら二句の間にこもれるを、和歌には余情といひ、俳諧には、はひといふ。それを一法の名となせるは付合の事も不会得にや」(十論為辨抄、第九段)と評したというのは、去来が「うつり・響・句ひは付やうのあんばい也」(去来抄、修行)と言っているのと思ひ合せても、これらはほんのニュアンスの小異に過ぎず、同じ次元に列べて、区別することは不可能で、支考の記すところを、あながち芭蕉にかこつけた謬言として斥けるべきではあるまい。もちろん、私も蕉風連句の付合の粹が、余韻・余情・推移・映発・語勢(句勢)・気鋒など、直観的な感合によるものであり、それらを「はひ・うつり・ひびき」などの感性的用語を以て示すことや、また、それらが事実、すぐれた付合の特徴をなしていることを否定するものではない。ただ、貞門連句は詞付、談林連句は心付、蕉風連句は句付など頭からきめつけて考え、蕉風連句のすべてを「はひ・うつり・ひびき」に結び付けた恣意的解釈は、ひいきの引倒しだと、ここに言いたいのである。さいわい、今日の新しい研究段階では、貞門の心付、談林の詞付の事例も多く提示され、蕉風にあっても、心付(意味付)が多く、また芭蕉自身、「付物にて付けがたからんを、さつぱりと付物にて付けたらんは又手柄なるべし」(去来抄、修行)と、物付(すなわち詞付)さえ、全面的に排斥してはいない。

そこで、私は本書の付合の注解に当たっても、曖昧な「はひ・うつり・ひびき」などいう語を編著者の主観によって用いることをつとめて避けるよう心がけた。一方、それに反して、私は高瀬梅盛編『類船集』(延宝五年序)及び坂上松春編『当流俳諧小傘』(元禄四年序、同五年刊)を援用し、たとえば「有明↓油火」(類船)とか「有明↓飛脚」(小傘)のこゝく注記することがしばしばあった。それは『類船集』